

最澄と空海

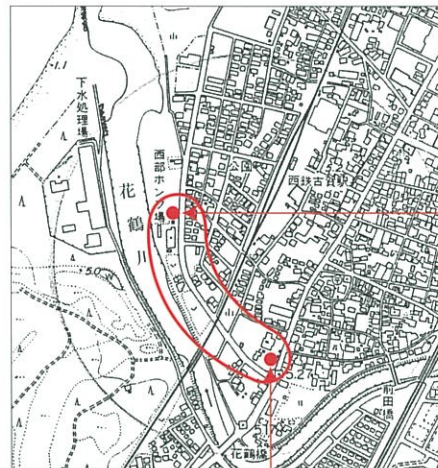
古賀市内を流れる大根川は古賀で最も大きな川で、下流を花鶴川といいます。その大根川は古賀橋の少し上流からさらに大根川と青柳川に分かれています。この大根川には伝教大師（最澄）と弘法大師（空海）にまつわる伝説があります。



▲ 伝教大師像（花鶴皇石公園）古賀南区



▲ 花鶴が浜公園（花鶴川河口）



花鶴が浜公園

花鶴皇石公園

～伝教大師伝説～

最澄は遣唐船で延暦23（804）年に唐へ渡り、天台宗の仏道をおさめて日本へ帰りました。最澄の乗った船は肥前にむかって進みますが、途中嵐に遭い、古賀の浜へ着きました。一夜明け一命をとりとめた最澄は、葦がはえている浜に立って、ほっと一息つきました、濡れた衣を乾かすため小高いところに登っていくと、昨日とはうって変わった静かな海が広がっています。頭上では鶴が飛び交い始め、空は何千という鶴が舞い、やがてエサを求めて葦の生い茂る浜に降りてきました。美しい光景にみとれていた最澄は、はっと我に返って「快哉如花鶴」と叫びました。それで大根川と青柳川の合流点から下流を「花鶴川」と呼ぶようになったのです。

新宮千年家の横大路家に伝わる文書には、次のようなことが書かれています。唐より最澄が帰国の時、古賀の花鶴浜に着き、唐より持参の独鈷と鏡を投げると、立花山の方へと飛び去りました。通りかかった男に、最澄が何か見なかったかと尋ねましたら、男は「突然火の玉がとんできて山が振動した」といいました。男に案内をたのんで一緒に行き、投げた独鈷と鏡が見つかりました。そこに建てられたのが独鈷寺のはじまりと伝えられています。そして男は最澄から源四郎という名をもらい、千年家を開いたのが、横大路の祖と言います。

～弘法大師伝説～

平安時代のころ、弘法大師（空海）が諸国行脚の途中で筵内を流れる川の橋（今の鷺白橋から少し下流にかかっていたといわれます）を通りかかりました。その川では地元の老婆が掘り出したばかりの土のついた大根を洗っていました。昨夜から歩きづくめで、お腹をすかしていた大師は、大根を分けてもらおうと橋の下におりていき「おばあさん、すまんがその大根を1本わしに分けてくださらんか」とお願いしました。するとおばあさんは、みすぼらしい姿をした大師を見て「おまえさんに分けるような大根はありゃせん」と言って大師に川の水をかけました。大師はもう一度「そう言わずに分けて下さらんか」とお願いしましたが、おばあさんは「何度言っても同じことじゃ」と言って顔を真赤にして怒りました。

大師は口の中で念仏をととなえ、そして手にした金剛杖で地面を三度叩きました。すると今まで豊かな水をたたえて流れていた川は、急に川底を見せたではありませんか。それからというもの、見かけばかりにとらわれたおばあさんの行為をいましめるように、大根の季節になると川の水が干あがるようになりました。この川をそれ以来、大根川といわれます。



▲ 弘法大師像 筵内区



▲ 花鶴が浜公園



弘法大師像

伝教大師 最澄（766～822）近江国〔滋賀県〕京都府比叡山延暦寺・天台宗

弘法大師 空海（774～835）讃岐国〔香川県〕和歌山県高野山金剛峰寺・真言宗

参考文献 古賀町誌、新宮町誌、粕屋の昔話 粕屋地区文化財担当者会編 2000